

た所によつて、東洋史殊に塞外地方の歴史の研究に從事して居るものが、輒近主として如何なる方面に努力し、その學問の趨勢が如何なる方向を取つて居るかの一斑を窺ひ得れば足るのである、漢史を研究し、これに依て支那以外の東洋諸國の史蹟を探る外に、新たに得られたる、若しくは得らるべき此等諸國の史料の研究によつて、從來の

知識の上に一步を進めやうとして居るに外ならぬ、従つてこれが研究者に取つては缺く可らざる第一の武器は言語の知識であつて、これ無くば殆んど如上の大勢に伴ふて研究の歩を進めることは不可能なるのみならず、折角漢史に記されて居ることを正しく解釋することもまた覺束ないと言はなければならぬ。

雜纂

考古學の葉 (第二回)

文學士 濱田耕作

第二章 資料

一、遺物と遺跡

一四、考古學の資料 狹義の史學が主として文書

記錄等文字によりて記されたる内容を資料として研究するに對し、考古學は人類の殘したる物質的遺物 (material remains) を其の研究の材料とする

ことは已に之を述べたり。然らば此の物質的遺物とは如何なるものを指すかと云ふに、金石土木の類より成れる建築物彫刻繪畫の如き美術品は固より、各種の工藝品等人類の意識的に製産したる一切の空間的在在を有する物件を網羅して、其の類を選むこと無し。又た人類及家畜其者の遺骸又た糞尿等の排泄物と雖も其の中に包含するのみならず、其の無意識的に残したる足跡手澤の痕をも逸す可きに非ず。而かも此等の考古學的資料は他の自然科學の資料の如く、同性質若くは近似の性質を有する資料を發見すること困難なるを以て、實驗の材料たるに適せざるもの多きは、稍々其の性質を他の自然科學と異にする所なりとす。

灰及炭化物の發見は人類の棲息住居せるを證する最も有力なる資料なり。其例一々枚舉に遑あらず。スタイン氏は敦煌附近の尸城に於いて、其の城樓の遺址より馬糞を多く發見し、之を以て當時傳馬の存在を證するの一資料とせり。スタイン氏、ガセー第二卷、一六二頁、其他家畜の遺骨の存在は、其の

人民生活の狀態、文化の程度を卜するに最も必要なる資料たるは言を俟たず。

一五、遺物の存在場所 さて此等考古學的資料の形狀性質は、千態萬狀を極め、其の存在の場所に至りても亦た一々相同じからず。或は水中に存すること瑞西湖底の新石器時代の遺物、伊太利チミ湖底の羅馬時代の樓船の如き、又た希臘キララ海中より發見せる大理石、銅像の如きあり、或は依然として地上に存すること、埃及のピラメツド、英國のストーンヘンジの如きあり。然れども一時地上に存在せしものが、或は風雨に破壊せられて、其上に有機物の構成せる土壤を生じ、或は噴火流砂の爲め等各種の原因により、今や地下に埋められたるもの最も多し。而かも此の土砂は人類の遺物を保存すること最も確實に、且つ永久的のものにして、空間に露出し、人間に傳世するものは、風雨火災其他人類の意識的無意識的の破壊力によ

りて、早く亡失するの運命を有すること常なり。

埃及及び支那土耳其斯坦等の乾燥せる沙漠中に埋没せる遺物は、紙織物等の如きに至るまで、頗る完全に保存せらるゝは人の知る所なり。又た全く水中に埋存せるものも、瑞西湖底の場合の如く、新石器時代の織物、其他木製角製のもの保存せらるゝこと尠ならず。要するに外氣に接觸し、濕氣に浸害せらるゝものは、最も早く破壊消滅に歸す可きものにして、吾人が土中より發掘したる多數の考古學的資料が、今迄土中に存在せし年數よりも遙に短き年數の中に破壊せらるゝを豫想する時は、之が保存法に苦慮すると同時に、研究の効果を擧ぐるに非ずんば其の發掘の罪過を償ふ能はざるを知る可きなり。

**十六、遺物と遺跡** 考古學的資料は普通分つて遺物と遺跡の二となす。然れども此の區別たるや、全く便宜上常識のものに過ぎずして、兩者の間截然として區別し得可きに非らざるなり。遺物とは通常形体大ならずして、位置を變更運搬し得きもの、例へば一個の陶壺石斧銅劍等の如きものを

云ひ、遺跡とは形体大なる遺物、若しくは遺物の一群にして、運搬することの困難不能なること、家屋城塞墳墓等の如きものを言ふ。然れども遺跡と雖も多大なる勞力を用ふれば、位置を變更すること必しも不可能なるに非ず。遺物と雖も其の發見の位置を變化して、資料の價値を滅却すること決して少なきに非ず。此の兩者の區別は全く便宜的のものに過ぎざるを知る可し。

遺物は單一に發見せらるゝことあり、又た同時に多數の存在することあり、單一の場名と雖も、其の學術的價値大なること無きに非ざるも、其の最も價値ある遺物は、モンテリウス氏 (Montelius) の所謂「フンド」(Fund) と稱するものなり。即ち同時に殘し置れるものと認ることを得べき状態の下に發見せられたる遺物の一群を名く。(Die Summe, welche unter solchen Verhältnissen gefunden worden sind, dass also ganz gleichzeitig niedergelegt werden müssen. Montelius, Methode) 是れは通常住居地墓地等よりの發見するものにして、斯の如き遺物の屢々發見せらるゝに従つて、遺物の年代を考定するに有力なる證據を得るに至る可し。其の年代考定

の次第は後章之を説く。

## 二、遺物の種類

一七、人類と器物 人類と他動物と異なる點多しと雖も、或る學者は其の特徵の一として、「人類は器具を使用する動物なり」(tool-using animal)となすものあり。之を嚴密に吟味すれば或は高等の猿類に於て、多少器具的の意味に木片石片等を使用すること無きに非ざる可きも、天然の材料に多少の加工をなし、適切なる意義に於ける器具を使用するものは、人類の外他動物に認むること能はざる可し。蓋し人類は他動物に比して肉体の器官却つて發達せず、之を補ふに精神的能力を以てするなり。此の腦力の發現の一として器具を製し肉体の足らざる所を補ひ、足れる所を更に充分にするを得。されば器具の使用は、人類が他動物と生存競争場裡に立ちて優勝せしむ可き肝要の一條件と云ふ可きなり。故に考古學的遺物の最も主要な

る部分は此の器具を以て其の内容となす。

一八、器物の材料 人類の未だ開化の域に達せざる以前に於いては金屬の如く主として人為的方法を竭して生産せらる可き材料を使用すること能はず、自然界に於いて最も手近に存在する木石等の材料を以て器具とするに至ることは、小兒若しくは野蠻人の研究によりても明かなる所なり。然れども此の木竹等の材料を以てせる器具は其の性質上早く朽滅して今日に存するものは、後世の製作品に過ぎず。故に石製及骨角製の器具とが今日吾人の知ることを得可き最古の人類の遺物にして、次に來るものは金屬製の器具なり。此等器具の材料によりて、人類文化の程度を石器時代青銅器時代鐵器時代等に分つことに關しては、後節別に述ぶる所ある可し。

一九、石器及角骨器 石器は人類の遺物中最も古きものにして、其の文化の程度最も低き時代の遺

物なれば、製作上に入種的民族の若くは個人的性質未だ多く現はれざるを以て、其の形狀性質最も普遍的なるを常とす。従つて此の遺物を資料として吾人の研究し得る範圍も亦た自から局限せらる。

石器を製作の時代により 大別して舊石器(Old  
Iaeolith)及新石器(Newer)の二となす。此の區別は單に石器のみによるものに非ずして、他の諸條件を參照するものなることは後述の如し。石器のみによる分類は即ち打製(chipped)及び磨製(polished)の兩者なり。舊石器には打製のもののみなれども、新石器には打製の外に磨研を加へたるものあり。我が日本に於いては打製磨製の兩種類の石器を發見するも、共に新石器に屬し、舊石器と認む可きもの未だ發見されざるなり。又た舊石器より更に古きものを原石器(Boleth)と稱す。これは理論上其の存立を許す可きものなれど、積極的

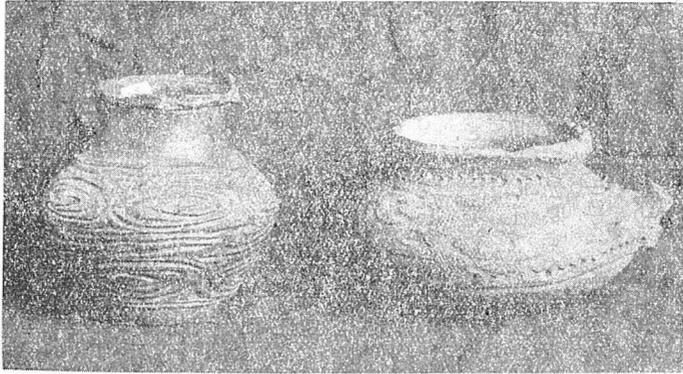
に人工によれるものなることを證すること難し。石器の研究には其の形狀、製作の狀態等の外に、石質を注意するの要あり、是れ其の原料たる石材の他地方より運搬せられたるものなるを以てなり。

日本に於いて發見する石器は、磨製のものに石斧、石鏃、石槌、石槍、石匕等あり。其の形狀歐洲發見のもの等と大同小異なり。此の石器等に關する詳細なる記述は、今ま之を省畧に附して、凡て高橋健自君の「考古學」八木英三郎君「日本考古學」等に譲る。

骨角器も古く舊石器時代の中期より存在し、新石器時代に至る。我國に於いても石器發見の遺跡殊に貝塚より之を出す。其の種類には銛、針、鏃、弓筈、浮袋の口等あり。凡て此の石器骨角器等の研究に際して、其の如何なる種類の器物が、一遺跡に於いて多數なるか、之を注意することは、其の住民の職業習性の研究に資する所ある可し。

二〇、土器 石製の利器を使用し、食物の採取を

事とせる野蠻の人類にありて、次に尤も必要なる器物は飲食物を貯藏し、之を調理す可き容器なり。其の始めは貝殻木實の殻等の天然物を主として利用せしならんも、其の耐久性と形狀容積等の意の如くならざるものあるを以て



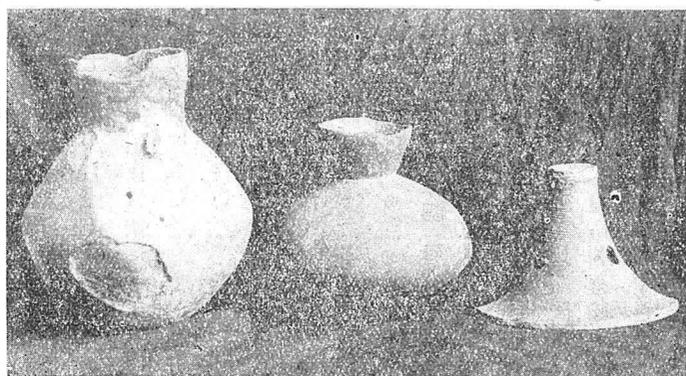
繩紋式土器

遂に此等の欠陥を補ふ可き新器物の發生を促すに至れり。思ふに太古の人類は燃火の際、其の近傍の粘土が自から堅くなるを経験したるなる可く、粘土が最も工作に便にして、且つ採取に容易なる材料たるを見るに及んで、遂に土器の製作を案出せるに至れるは自然の勢なり。

土器の形狀の其の始めは果實の殻等の自然物を模したるが、後漸く其の利用の目的に従つて特殊の形式を發展せり。其の原始的製作法に凡そ四種あり。(一)は刮り窪め法、(二)は藍塗り法、(三)は巻き上げ法、(四)延し上げ法是れなり。後漸く輓轆を用ゐること發見せらる。而して土器の出現は人類文化の發達上一大轉機を與へたるものにして、學者多く、之を以て野蠻 (savagery) と半開 (barbarism) との區別をなすの表幟とせり。即ち此の飲食物は貯藏調理するの器用ありて以來、人類は日々食物の採取にのみ身神を費消するの外、

之を他方面に用ゐることを得るに至れるを以てなり。されば農業牧畜の發達は先づ土器の發明を豫想せざる可からず。歐洲に於いて土器の現はれしは、新石器時代の初めに於いて、爾來其の製作術は次第に進歩して、遂に陶器磁器となり、現代に於いても、人類生活上最も緊要なる器用の一部をなす。

二一、土器と考古學 土器の材料たる粘土は年處を經るも破滅すること無く、金屬大理石等の如く、後ち之を他に利用するの便なきを以て、其の今日に遺存する分量尤も多し。且つ其の形狀の多樣にして、變化の急激なることは、考古學の研究資料として尤も價値の大なる所以にして形狀、紋樣及び製作法の三方面を考察するを要す。ペトリー教授は土器を以て“Essential alphabet of archaeology”と言はれたる洵に以あるなり。又たセイヌ博士 (Gayce) は曰く「地質學者が化石によりて地上



に出現せる生物の歴史を編するが如く、考古學者は土器を正當に解釋して、人類の過去の歴史を明にする永固なる證據とす。……土器の研究は實に考古學的年代の副鑛となるは決して怪しむを要せず。科學的發掘者の第一目

的は、其の發見せる土器の順序を定め、之を他所にて發見せられたる同種の遺物との關係を明にするに在り。されば科學的發掘には、先づ何よりも最初に、其の發掘せる一見無價値の如き土器の破片を、一々精細に觀察記錄するに在りと云はざる可からず」と。蓋し至言なり。(Soyce: Archaeology of Cuneform Inscription Pp. 36—39)

土器の種類性状は各國相同じからずと雖も、其の原始的のものに至りては、彼是相類するもの少なからず。此等の土器に關する記述は今茲に之を試むるの暇なしと雖も、我國に於ける古代の土器は凡そ三種あり。(一)は繩紋式土器にして石器と伴存して貝塚等より發見せらるもの、(二)は彌生式土器にして石器と伴ひ或は金屬器をも共に發見す、(三)は祝部土器にして土器として古墳より發見するものなり。(一)は普通アイヌの祖先の手に成れるものと考へられ、(二)は古代日本人の土器にして、其の窯法は朝鮮を経て輸入せられたる支那漢式のものとなす。而かも第二に至りては或は太古日本人のものとなし、或は卑人民族のものとなす。然れども學者の特に注意すべきことは、土器の差異は常に人種の差異を語るもの

に非ず、同一人種にして各種の事情により頗る異種の土器を製作するに至ること珍しからず。クリート島の考古學に於いて見るが如し。我が土器に關する吾人の考説は別に機を得て述ぶることある可し。

二一、金屬器。金屬を利器の材料として使用することは土器の發明に次ぎて、人類の文化史上に於ける一大轉機なり。金屬製の利器が銳利にして且つ永久的使用に堪へ、戰爭に於ても狩獵に於いても、此の利器の使用者が常に優勝なる位置を占むることは言を俟たず。金屬のうち人類の文化に最も肝要なる關係を有するものは、銅鐵及青銅(銅と錫との合金)の三者にして、之を文化金屬(銅、鉄、錫)と云ふ。黄金の如き黃金屬は純粹の狀態にて發見せらるゝことあり、早くより人類の用ゐるところなりしも、人文の發展に興ること大ならず。鐵は早く酸化して錆となり器物の形狀を失ふこと常なるも、錆自身は永久に遺存するを以て、遺跡の發掘者の周到なる注意によりて之を知るこ

とを得可く、銅及青銅は綠色の鏽を生ずるも長く地中に保存せらる。文化金屬中銅最も早く知られ、次いで青銅の合金法發見せられ、鐵は最後に其の使用顯著となれり。此等金屬の始めて發見せられたる地方其他に就きては、後節利器の材料による時代區分を述ぶる



視 部 土 器

際に譲る。要するに金屬器の考古學的資料としての價値は石器に比して遙に優るものあり、民族地方時代等の差異に本く製作の變化亦た頗る著しきものありと雖も同時に偽造模造の類漸く多きを注意せざる可からず。

二三、彫刻繪畫其他。石製金屬製の利器及土製の容器は多く實際的必要に本く器具なれども、人類は早く舊石器時代の中期より宗教的美術的作品を残し、其の手法驚く可きものあり。此等の遺物が考古學の資料として、實用的器具に比して、更に有益なるは言ふを須めず、美術史家は美術として之を研究し、宗教史家の宗教の方面より之を取扱ふも、考古學者は更に一般文化の研究として、あらゆる方面より之を利用す可きなり。

歐洲舊石時代人類の製作に係る角牙等の彫刻物及洞穴中繪畫は寫實の作品として驚嘆に値す。曾て其の眞偽を疑はれしも現時學者は其の眞物なるを確信せり。我國に於いても石器時

代より土偶等の遺物あり、金屬時代に入りては埴輪偶像石人墳墓の表飾等あるも、頗る弱貧なるを免れず。我が京都文科

大學考古學研究報告第一冊は、此の内「肥後に於ける裝飾ある古墳横穴」に就きて調査せるものに係る。（此章未完）

## 畫人傳説の解釋

—光琳と破笠—

文學士 福井利吉 郎

畫人傳に關する批評的研究に乏しい我國の現狀に於ては、畫人傳説の多くはたゞ素材のまゝに放棄されてゐる。偶々之に興味を感じるものは學術的よりも寧ろ文學的に之を解せんとする結果、素材の創作的變化を受けた場合が多い。近頃光琳傳説の或るのものに就て此種の例に接したのを機會に、夫等の解釋に對する私見を述べ、併せて畫人傳説の畫史史料としての意義の一端をも明かにしたいと思ふ。

光琳傳説中最もよく人に知られてゐるものは花見辨當の話である。此話を流布するに最も力のあつたと思はれる『近世繪畫史』は其の出所を記してゐないが、故飯島氏の稿本『蒔繪師傳』より出た事は殆ど疑が無い。たゞ細かに注意すれば、蒔繪師傳に「竹皮の一面金箔を押し山水花鳥など細かに畫きてあり」とあるのを、繪畫史には「花鳥山水を蒔繪し」とした丈の相違が見ゆる。然し此の點に就て別に出所があつたとは思はれぬので、繪畫史の著者は金地濃彩の繪の上に握飯煮しめを置